


 書評

宮尾益知 編

「気になる子ども」へのアプローチ

ADHD・LD・高機能 PDD のみかたと対応

山田 孝

子どもたちのための「不思議な本」

この本は不思議な書である。例えば、発達障害への小児科的対応と精神科的対応というところで (p. 4), いきなり「一次障害に加えて、二次障害 (うつ状態, 反抗性障害, 行為障害など) を併発してくることが多々ある」として, 基本症状よりも, 二次障害について説明していくといった本である。基本症状については第 3 章で初めて説明がなされる。また, その第 3 章でも, 3 節に, 発達障害は早期発見が大切であるが, 早期発見をすればそれでよいわけではなく, 具体的早期対応が必要となるとしている。

そのように読んでいくと, 著者たちの気持ちが伝わってくるようである。著者の一人であり, 編者でもある宮尾先生は, 早期発見をした医師はその子どもにとって適切なアドバイスをしなければならないし, 場合によっては家庭生活, 家族機能など事細かな部分にも及ぶ必要があると言う。また, 軽度発達障害 (HFPDD, LD, ADHD) を早期発見する意義は, 保護者や周囲の心構えでできることと, 気になる行動を理解することにより, 対応を改善できることであると言う。

「思春期から成人に至る ADHD の問題点」では, 問題を内在化障害と外在化障害とに分けて考えると理解しやすい, と言う。幼児期のこちらの育ちかたとして, 愛着障害が前景に現れる場合には虐待を引き起こし, 対人関係での貪

欲さと空虚感が境界型人格障害に発展することがある。父親が家庭内暴力やアルコール依存のある場合には, 外在化障害として家庭内暴力がみられると述べている。内在化障害としての社会的問題点は, ニート, ひきこもりの進行から社会・生産的問題となり, 反抗挑戦性障害, 不安障害, パーソナリティ障害の存在と関連するという。

「成人の LD に対して」は, 求めていることを手紙に書いてきてもらう。その手紙を読むことで, そのクライアントの抱える問題が明確になってくる。すなわち, 最初のサンプルは手紙ということになるとしていることが, 興味深い。また, 中学校教師でもある月森先生の率直な意見にも耳を傾ける必要があろう。医師は専門用語を使わずに子どもの状態像や具体的な対応と支援についてわかりやすく説明してほしい。医療と教育の連携については, 具体的な内容をメモに書いて, 紙上で会話していただけるとありがたいと述べている。

この不思議な本を理解する鍵は, 帯封の「良き大人として社会に送り出すために」という文章にあった。著者たちがそのような考えの下に本書を書いたとは何と素晴らしいことであろうか。

(首都大学大学院作業療法学教授)

●A5 344 頁 2007 定価 3,675 円 (本体 3,500 円+税) 医学書院